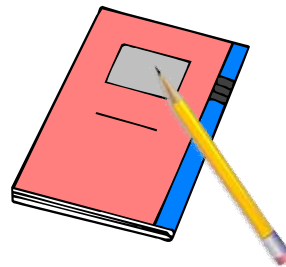


基礎・基本の定着を図る書写指導

～ 発達段階に応じた授業展開を通して～



那覇市立天妃小学校教諭

加島 そのえ

目次

テーマ設定理由	4 1
研究目標	4 1
研究仮説	4 2
1 基本仮説	
2 作業仮説	
研究構想図	4 2
研究内容	4 3
1 書写の基礎・基本について	
2 発達段階に応じた教材・教具の工夫について	
(1) 提示する文字について	
(2) 音声化・動作化による知識・技能の習得	
(3) ワークシートの工夫	
3 基礎・基本の定着を図る授業展開の工夫について	
(1) 知識・理解を深める指導	
(2) 学習意欲を高める指導	
授業実践	4 6
1 単元名	
2 教材名	
3 単元目標	
4 単元について	
(1) 教材観	
(2) 児童観	
(3) 指導観	
5 指導計画	
6 本時の学習	
(1) 目標	
(2) 授業仮説	
(3) 本時の展開	
結果と考察	5 0
研究の成果と課題	5 2
1 成果	
2 課題	

《主な参考文献と資料》

基礎・基本の定着を図る書写指導の工夫

～発達段階に応じた授業展開を通して～

那覇市立天妃小学校教諭 加島 そのえ

テーマ設定の理由

情報機器の発達により、社会生活はおびただしい数の活字に囲まれ、文字を書く機会も少なくなった。そのため、手書き文字に対する意識が希薄になっているように思えるが、生活の中で記録を取ったり、手紙を書いたりと書くことの必要性は変わらない。

新小学校学習指導要領における国語科の書写に関する事項の中に、低学年では「姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと」、「点画の長短や方向、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと」とある。そして、中学年で「文字の集まり（文字群）の書き方」の事項へ、さらに高学年で「目的に応じた書き方」に関する事項へと系統的に指導していく。小学校における書写は、日常生活や学習活動に生かすことのできる書写の能力を育成する役目を担っていると言える。

低学年の児童は文字を書くことに対する興味・関心が高く、新しい文字を早く習いたがったり、手紙を喜んで書いたりする。しかし、文字を書くための筆記具の正しい持ち方や姿勢を身に付けるには児童一人ひとりの発達や普段の生活習慣によって定着に時間がかかるため、書写の時間以外の学習活動とも関連付けて定着を図っていかなければならない。また、そのような持ち方や姿勢をはじめ、書写の時間に学んだことをしっかりと定着させるためには中学年、高学年でも継続した指導が必要である。

私自身の授業実践を振り返ってみると、書写の時間に正しい筆記具の持ち方や姿勢の指導をしても、個別の指導や書写の時間以外の学習活動で徹底させることが不十分で定着を図ることが難しかった。また、手本を見ながら真似て書く反復練習が中心で、正しく整った文字の書き方を理解させるための手だてが不十分であった。そのため、書写の時間は手本を見ながらゆっくりと丁寧に文字を書き、きれいに書こうとする気持ちがあるものの、ほかの学習の場面や家庭学習の文字を見ていると字の形が崩れたり、基本点画が間違ったりしていた。これは、低学年で指先の発達がまだ十分ではないこともあるが、文字の正しい書き方と整え方の理解が不十分であったためと考える。

以上のことから、日常生活に生かすことのできる書写の能力を身に付けるには、書写の基礎・基本を明確にして、その定着を図ることが必要であると感じた。そのために正しく整った文字の書き方を理解させるための手だてを工夫して児童が主体的に学びながら基礎・基本が身に付くようにしていきたい。

そこで、書写の指導において、発達段階に応じた教材・教具や授業展開の工夫をすることで、児童が主体的に学び、書写の基礎・基本が身に付くであろうと考え、本テーマを設定した。

研究目標

書写の基礎・基本を明確にし、児童の発達段階に応じた教材・教具や授業展開の工夫について研究する。

研究仮説

1 基本仮説

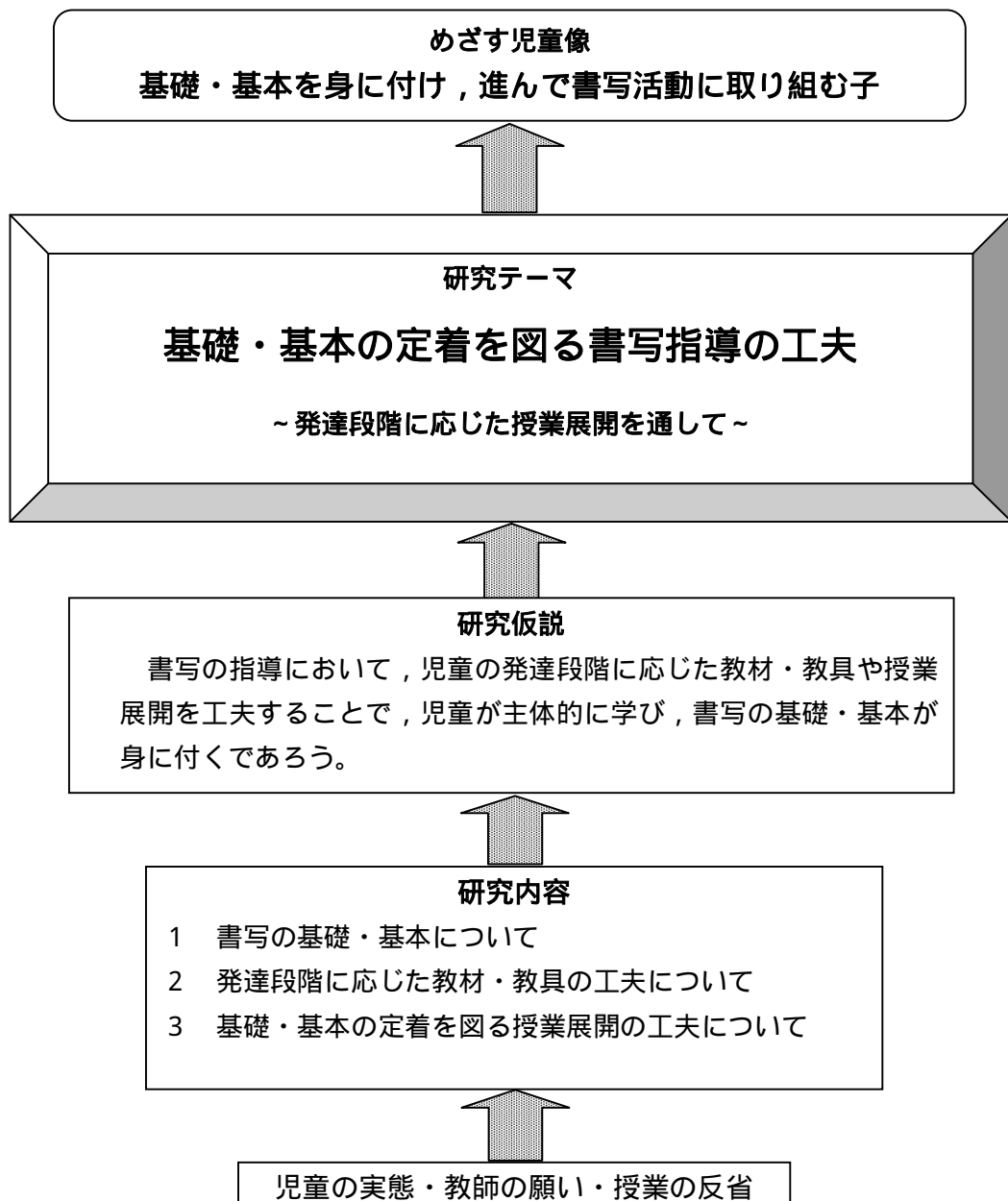
書写の指導において，発達段階に応じた教材・教具と授業展開を工夫することで，児童が主体的に学び，書写の基礎・基本が身に付くであろう。

2 作業仮説

(1) 正しく整った文字の書き方を理解させるために，教材・教具を工夫して文字の形をわかりやすく学ばせ，児童自ら文字の正しい書き方や整え方を発見させることで，正しく整った文字が書けるようになるであろう。

(2) 書写の指導において，基礎・基本を明確にし，発達段階に応じた授業展開を行うことで，児童の意欲が高まり，基礎・基本を身に付けることができるであろう。

研究構想図



研究内容

1 書写の基礎・基本について

書写に必要な事項を整理して取り上げたものに、「書写の要素」がある（表1）。小・中学校国語科書写の学習指導で扱われる事項で、学習指導要領では「書写の要素」を児童・生徒の発達段階を考慮して系統的に構成している。

この学習内容を指導するために、児童の実態（既習内容の定着度）を踏まえながら、これらの

要素のどのような内容を補い、新たにどのような内容を指導していくのかということを明確にすることが必要である。つまり、1学年から当該学年の前時までの既習内容と本時の目標が基礎・基本であり、本時の目標を達成するために必要な各要素の内容全てを基礎・基本と捉えて明確にするということである。

そして、学習内容の「知識・理解」や「技能」に加えて、正しい書き方について考える「思考・判断」や書写に対する「関心・意欲・態度」、「書写の日常化」も基礎・基本と捉え、5つの観点における基礎・基本を明確にした。

表1 書写の要素

姿勢・執筆	文字の大きさ
用具・用材	速さ
筆使い	字配り、配列・配置
筆順	書式・形式
字形	良否の弁別

表2 5つの観点における基礎・基本〔2学年 画の方向〕（○は既習事項、●は本単元で指導する事項）

関心・意欲・態度	思考・判断	技能	知識・理解	書写の日常化
○正しい姿勢や持ち方を意識して文字を書こうとすることができる。 ●画の方向が変わると文字の形がどうなるのか進んで見ることができる。 ●気付いたことを進んで伝えようとするすることができる。 ●正しく整った文字の書き方に気を付けて進んで練習しようとするすることができる。	●教材文字を見て、画の正しい方向について考えることができる。 ●おれ、まがり、そりの書き方の違いを考えることができる。 ●正しく整った文字の書き方(わかったこと)をもとに、自分や友達の文字の良いところや直すところなどを見つけることができる。	○姿勢や持ち方を正しくして文字を書くことができる。 ○横画・とめ・はね・はらいの書き方や文字の形などに気を付けて書くことができる。 ●画の方向に気を付けて、正しく整った文字を書くことができる。	○姿勢や持ち方、点画の書き方や正しい字形がわかる。 ●画の名称や方向、書き方を理解することができる。	○ワークシートの名前や気付いたことの書き込みなどをていねいに書くことができる。 ○常に姿勢や持ち方、点画の書き方などに気を付けて、整った文字を書こうとする意識を持つことができる。 ●常に画の方向に気を付けて、正しく整った文字を書こうとする意識を持つことができる。

2 発達段階に応じた教材・教具の工夫について

文字に対する興味・関心を高め、正しく整った文字の書き方を理解させるには、書写の用語や書き方など言葉の概念をつかませなければならない。低学年では言葉の概念をつかむことが難しいので、身に付けさせたい用語や書き方などを視覚的・感覚的に捉えることができるようにする。そして、教材を音声化・動作化することで知識・技能の習得に繋げ、ワークシートを工夫して習得した知識を活用できるようにする。

(1) 提示する文字について（図1）

基本点画の細かい部分が見やすいように教材文字は大きく提示し、「おれ」や「そり」などの方向が変えられるようにしたり、文字の画を一つ一つ切り抜いて分解したものを組み合わせたりして正しく整った形を視覚的に捉えさせる。

また、「はらい」は実際に物を手で払い、「おれ」は実際に物を折ったり、折り曲げたり、「そり」はモールやホースなどを弓なりに反らせるなど日常の動作や身近な物を取り入れることで感覚的に捉えさせる。

このように、文字を視覚的・感覚的に捉えさせることで児童は正しく整った文字を認識し、良否の弁別をする視点を持つことができるようになる。

(2) 音声化・動作化による知識・技能の習得

低学年の児童は物事を合い言葉にして唱えたり、動きを付けたりすることを喜び、音と動きを連結させて覚えることを好む。そこで、身に付けさせたい学習内容を音声化・動作化して繰り返し学習することで知識・技能の習得を図る。

毎時間、授業の導入や文字を書く前に姿勢や筆記具の持ち方を合い言葉で唱えながら体を動かして確認し、文字の空書きで基本点画や筆順の確認をする。

また、「まがり」と「おれ」の学習では、2つの違いを「まがり」は「トン（始筆）、ス、ス、スー（曲がる）」、「おれ」は「トン（始筆）、スー（送筆）、トン（止めて）、スー（向きを変える）」というように筆使いを音にして声を出しながら書くことで形と書き方の違いを感覚的に捉えることができるようにする。

(3) ワークシートの工夫（図2）

文字の変容が見えるようにする

授業展開に沿って書いた3つの文字、導入で書く「ためし書き」、正しく整った文字の書き方をつかむ場面の後に書く「練習」、学び合いの後に書く「まとめ」を見比べることができるようにする。3つの文字の変容から自己の課題や成長を確認することで学習を振り返り、次の意欲へと繋げる。

相手のワークシートに気付いたことを書き込めるようにする

正しく整った文字の書き方をつかむ場面の後に2回目の文字を書き（練習）、友達とワークシートを交換してその文字が目標に沿って書けているか互いに相手の良さや気付いたことを書き込めるようにする。相手の良さや気付いたことを伝えられるということは正しく整った書き方をつかむ場面で知識を得ることができ、それを活用することとなる。つまり、知識・理解、思考・判断の基礎・基本を身に付けたということが言える。低学年でも点画の長短や方向、文字の形など視点を具体的に提示すれば正しく整った文字であるかどうかの良否の弁別ができるようになる。

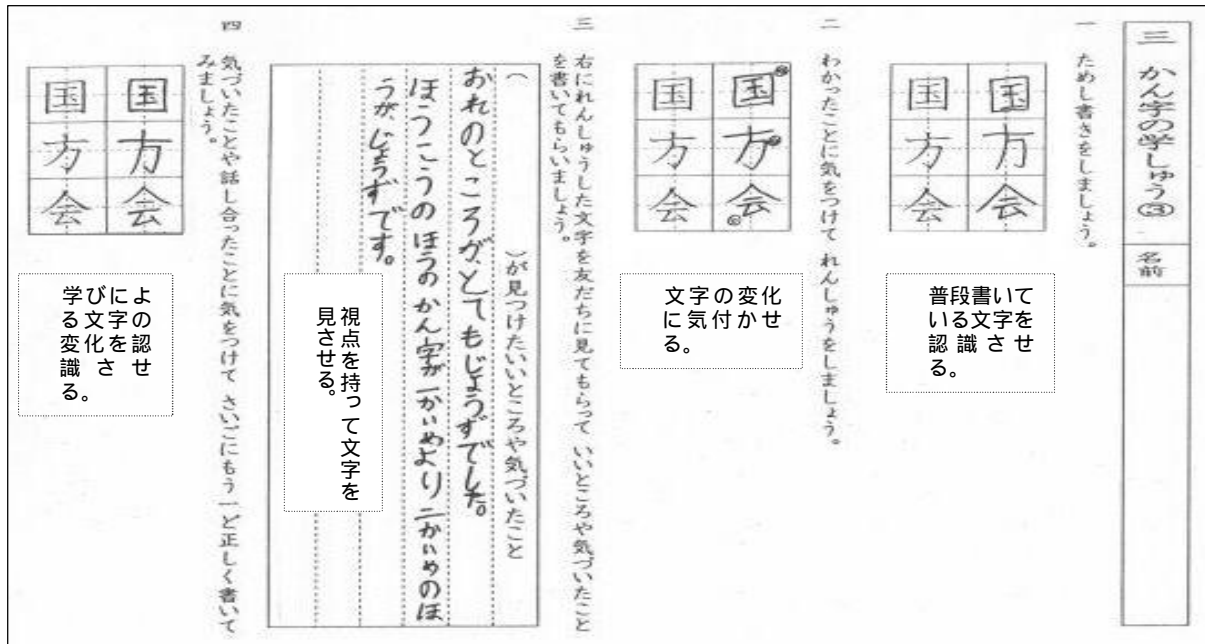
図1 教具の工夫（拡大文字・分解文字）



児童の実態に応じたマスの大きさで練習する

低学年では指の動きがまだスムーズではないので細かい点画が書きやすいように大きめのマスで練習させる。また、肩や肘が動かない程度に鉛筆を大きく動かすことで指先の働きが良くなると考えられるので児童の実態に応じて様々な大きさのマスで練習をさせる。

図2 ワークシートの工夫



3 基礎・基本の定着を図る授業展開の工夫について

基礎・基本の定着を図るには、体験的な学習と繰り返しの学習による知識・技能の習得と、児童が学びたい、学ぶことが楽しいと感じ、主体的に取り組む授業を展開することが大切であるとする。学習の前提にある学習意欲が知識・技能の習得を深め、その深まりによって学習意欲がさらに高まり、これらを相互に関連させて指導を行うことが基礎・基本の定着に繋がる。

そして、授業展開は児童の実態に応じて順序を置き換えたり、活動を選択して行ったりすることにより、さらに効果的に基礎・基本の定着を図られる。

(1) 知識・理解を深める指導

導入の工夫（ウォーミングアップ）

低学年で扱われるもっとも基礎的な要素となる姿勢と筆記具の持ち方の確認や空書きによる筆順の確認、前時の振り返りなどをする。繰り返しの学習により身に付けさせたい内容の定着を図る。

課題意識を持たせる工夫（ためし書き・目標の把握）

本時の教材文字を提示し、ウォーミングアップをした後、自分なりに教材文字を書かせる（ためし書き）。そのためし書きの後に目標を確認することで自分の普段の文字が正しく書けているのか、どのようにして正しく書くのかなど学習への課題意識を持たせることで児童が主体的に学び、理解を深めることができるようにする。

書き方の理解を深めさせる工夫（正しく整った文字の書き方をつかむ）

「正しく整った文字の書き方をつかむ」場面において文字の形や書き方を視覚的・感覚的に捉えさせ、思考を促すような発問で児童自身に書き方を見つけさせることにより、文字を正しく整えるための視点を持たせる。

その際、児童の実態に応じて既習内容を確認することが基礎・基本の定着に繋がり、正しく整った文字の書き方を見つける手だてとなる。

学習内容を定着させる工夫(たしかめシート)

学習内容を定着させるために本時の目標に沿ったたしかめシートをさせる。学んだことを応用することでさらに理解を深め、文字を正しく整えて書くための視点をつかむことができたかの確認をする。自己の理解度を確認することで次の意欲にも繋がると考える。学習内容を理解できていない児童にはヒントを与え、実態を把握して指導に生かす。

(2) 学習意欲を高める指導

文字に対する興味・関心を高める工夫

ア：教材文字の特徴を視覚的・感覚的に捉えさせる。

イ：文字の構成や成り立ちなどに目を向けさせることで文字のひみつや面白さを感じさせる。

ウ：文字に関するクイズを提示したり、児童にクイズを作成させたりする。

学び合いの工夫

文字を正しく整えて書くための視点をもとに学び合いの場面で友達と互いの良さを認め合い、気付いたことを伝え合う。視点を持って学び合うことにより、互いに学びを広げ、良否の弁別ができるようになる。また、低学年ではほめられたり、認められたりすることを喜び、互いによくほめ合うことができる。この学び合いを通して文字を観る視点も養われ、良否の弁別ができるようになる。

図3 たしかめシート

☆画の「おれ」、「まがり」、「そり」があるかん字を下からさがして、線でおさびましょう。また、その画のぶぶを赤色でなぞりましょう。 「おれ」「まがり」 「そり」のまんたい 名前	画の方こうのまんたい 名前() ○画の方こうが正しいものに○をつけましょう。 ① 円 円 ② 月 月 ③ 出 出
--	--

授業実践(第2学年)

1 単元名 かん字の学しゅう

2 教材名 画の方こう

3 単元目標

- 漢字の筆順や画の方向、付き方・交わり方などの「字形の整え方」を正しく理解して字形を整えて書くことができるようにする。
- 字形や書き方の似ている文字に気を付けて、正しく書くことができるようにする。

4 単元について

(1) 教材観

本教材は画「おれ・まがり・そり」の方向を正しく理解して書くことがねらいとなる。

児童は「おれ・まがり・そり」の書き方について1学年の平仮名の単元と1学期の片仮名(「おれ・まがり」のみ)の単元の中で学習しており、本教材では、漢字の学習を通して、正しい画の方向について理解する。

「おれ」は、『国』のように真下に折れるものと『方』のように内側に折れるものや『会』のように上から横へ折れるものがある。『国』は真下に折れるので児童にとって書きやすい教材であり、普段の生活の中で時間割をメモする際、「国語」の文字をよく書いているので身近でもある。『方』は内側に折れるのが真下になりやすく、縦から横へ折れる『会』は少し斜め上に上がって「はらい」も含んでいるので、画の方向を変えて見せることで正しく整った形を捉え、画の方向に気をつけて文字を書くことができるようになると思う。

(2) 児童観

事前のアンケートで80%以上の児童が「書写(硬筆)の学習が好き」と答えている。しかし、自分の文字がきれいだと思う児童は40%、もっと上手になりたいと思っている児童が90%いた。このことから、本学級の児童は文字を書くことに苦手意識はあるが、きれいな文字を書きたいという願いを持っている。

普段の書く活動を見ていると、ほとんどの児童は注意を促してもあまり点画を意識しないで書く傾向にある。また、きれいに書きたいという気持ちはあるが、手本を見ても細かいところまで見ていなかったり、正しい書き方がまだ分かっていなかったりする。そして、自分なりに正しく書いているつもりになっているところが見られるので、友達とお互いに見比べることで自分の課題に気付かせたい。

(3) 指導観

これまでの私の実践では手本を見ながら真似て書く反復練習が中心だった。今回の学習では教材と授業展開を工夫して児童自ら課題を見つけることができるようにし、正しく整った文字の書き方の理解を深め、主体的に学習できるようにしたい。

そこで、学習の課題を捉えさせるための教材は、文字を拡大して細かい部分まで見やすくしたり、色分けをしたりして、視覚的に捉えられるようにする。本時では、画の「おれ」の部分が動く（角度を変えられる）教材を使って、画の方向が変わると文字の形が悪くなることに気付かせたい。また、「おれ」の書き方は一旦止まってから方向を変えることも押さえる。そして、これまでの学習（国語の時間や片仮名の書写）を振り返りながら、児童の思考を促すような発問をすることで、児童の気付きがたくさん出るようにしたい。

文字を書くときは、1学年で学習した姿勢、持ち方を写真や教具を使って確認し、これまでに学習してきた点画（とめ、はね、はらいなど）の書き方や筆順などもその都度確認して、児童が意識して書けるようにしていきたい。姿勢については、書くときだけでなく、話を聞くときなど普段の学習全般の中でも指導していきたい。

練習をした文字は自分で批正したり、友達と見比べて気付いたことを教え合ったりすることで自分の課題に気付き、もっと上手になりたいという意欲や、自分の文字を改めようとする気持ちを持たせたい。

次時では、「おれ」の学習を踏まえて「まがり・そり」の画の方向について学習する。「おれ」と同じように正しい方向があること、「おれ」と違って筆記具の動きを止めないで徐々に方向を変えて書くことを理解させ、画の方向についてまとめ、練習の時間を設けて習熟を図る。

以上のように児童が主体的に学ぶことができるような手だてを工夫することで書写の基礎・基本の定着を図りたい。

5 指導計画（6時間）

【関】：関心・意欲・態度 【思】：思考・判断 【技】：技能 【知】：知識・理解

教材	時	本時の目標	主な学習内容と活動	・指導上の留意点 具体的評価基準(おおむね満足できる)
正しい書き順	1	○片仮名と似ている部分の書き順を正しく理解し、進んで練習に取り組むことができる。	・片仮名と似ている部分を見付け、書き順がどうなっているか考える。 ・児童同士で文字を見合って、相手のよいところや気付いたことを伝え合う。	・教材文字を拡大したり、色分けしたりして、書き順が理解しやすいようにする。 ・繰り返し空書きをして書き順を確認する。 ・友達の発表を参考にさせたり、書き方を示したりする。 【思】友達の発表やヒントを参考に、お互いが書いた文字について気付いたことを書くことができる。
	2	○片仮名と似ている部分の書き順や字形に気を付けて、いろいろな語句を書くことができる。	・片仮名と似ている部分のあるいろいろな漢字を見付けて、書き順に気を付けて正しく書く。	・片仮名と書き順が同じものと違うものがあることを押さえる。 【技】黒板の資料を見ながら、書き順に気を付けて書くことができる。
画の方向	3 本時	○「おれ」の方向を正しく理解し、自分の課題に気付いて練習することができる。	・「おれ」の正しい方向を考え、書き方を理解する。 ・児童同士で文字を見合って、相手のよいところや気付いたことを伝え合う。	・「おれ」の部分が動く教材を使って、「おれ」の方向が変わると文字の形が悪くなることに気付かせる。 ・ワークシートを工夫して互いの考えが伝えられるようにする。 【関】【思】友達の発表やヒントを参考に、互いの文字について気付いたことを見つけて書くことができる。 【技】【知】正しい画の方向を示されることで気を付けて正しく書くことができる。

付き方・交わり方	4	「そり」、「まがり」の方向を正しく理解し、気を付けて書くことができる。	「そり」、「まがり」の正しい方向を考える。 - 正しい書き方を理解して練習する。	前時の学習を生かして、「そり」、「まがり」にも正しい方向があることに気付くことができるようにする。 【技】正しい画の方向を示されることで気を付けて正しく書くことができる。
	5	既習の漢字の中から「おれ」、「まがり」、「そり」のある漢字を見つけて正しく書くことができる。	「おれ」、「まがり」、「そり」のある漢字を見付けたり、その言葉を使って短文を作ったりする。	見付けられない児童には教科書を使わせたり、友達と教え合わせたりする。 【知】具体的なヒントを手がかりに既習の漢字の中から「おれ」、「まがり」、「そり」のある漢字を見付けることができる。
	6	画の付き方・交わり方を正しく理解して、正しく書くことができる。	- 二つの教材文字を見比べて、付き方・交わり方の違いを見付ける。 - 正しい付き方・交わり方を理解して練習する。	【思】画が付いている部分や交わっている部分を示されることで、画の付き方・交わり方に違いがあることに気付く。 【技】画の付いている部分や交わっている部分を示されることで気を付けて文字を書くことができる。

6 本時の学習（3時間目）

(1) 目標

- 「おれ」の方向を正しく理解することができる。
- 自分の課題に気付いて、正しく書くことができる。

(2) 授業仮説

- 「おれ」の正しい書き方を理解させるために、画の方向が変えられる拡大文字を見せたり、ワークシートを活用したりすることで、正しい画の方向に気付き、意識しながら正しく書くことができるであろう。
- 自分の課題や友達の良さに気付かせるために、自分で批正したり、友達と見比べたりすることで良否の弁別ができるようになり、さらに意欲的に文字を書く態度が身に付くであろう。

(3) 本時の展開

	学習内容・活動	指導・支援上の留意点	評価の観点・方法
導入 7分	1 今日の学習 「国」、「日」、「田」、「四」、「高」、「里」、「月」の漢字を見て、全て「おれ」があることに気付く。 2 ためし書き 「国」、「方」、「会」を書く。自分なりに課題の文字を書いてみる。	「おれ」の部分を確認し、これからどんな学習をするのか予想させて期待を持つことができるようにする。 - 文字を書く前に合い言葉で姿勢と筆記具の持ち方を確認し、空書きで筆順の確認をして、既習内容に気をつけて書くことができるようにする（ウォーミングアップ）。	

	学習内容・活動	指導・支援上の留意点	評価の観点・方法
展 開 28 分	3 めあてをきめる 画の方こうに気をつけて かん字を書こう。	・「おれ」の部分が動く教材を見せて「おれ」の正しい方向について学習することを確認する。	
	4 正しく整った文字の書き方をつかむ ・画の方向が変えられる拡大文字「国」、「方」、「会」を見て、気付いたことを発表する。 ・たしかめシートをする。 ・「おれ」の書き方を考える。 	・画の方向が変わると文字の形が悪くなることに気付かせる。 ・既習の内容(横画の書き方、とめ、はね、はらい、画と画の間隔など)にも気を付けしないと正しい文字が書けないことを押さえる。 ・理解できていない児童にはヒントを出す。 ・「おれ」を道の曲がり角に例えて、角を折れるときは一旦止まってから方向を変えること、徐々に方向を変える「まがり」とは違うことを捉えさえる。「トン(始筆)、スー(送筆)、トン(止めて)、スー(向きを変える)」の音で覚えさせる。	・拡大文字を見て、正しい画の方向について考え、気付いたことを発表することができる。【思】(発言) ・正しい画の方向が分かる。【知】(たしかめシート)
ま と め 10 分	5 練習 ・「おれ」の方向に気を付けて練習する。	・正しい書き方に気を付けて練習できるように声をかける。	
	6 学び合い ・友達と見合って、互いの良いところや気付いたことをワークシートに書いて知らせ合う。 	・互いの文字を見て気付いたことを伝えられるようにし、みんなの気づきをまとめる。 	・気付いたことを伝え合い、正しい書き方を理解することができる。【関】【思】【知】(ワークシート・観察・発表)
ま と め 10 分	6 まとめ ・話し合ったことをもとに、画の方向に気を付けて「国」、「方」、「会」を正しく書く。	・気付いたことを生かすことができるように声をかける。 ・ためし書きと比べて良くなっているか確かめさせる。	・画の方向に気を付けて正しく整った文字を書くことができる【技】(ワークシート)

結果と考察

【検証1】

正しく整った文字の書き方を理解させるために、教材・教具を工夫して文字の形を分かりやすく学ばせ、児童自ら文字の正しい書き方や整え方を発見させることで、正しく整った文字が書けるようになるであろう。

【結果】

図4は、書き方を理解する場面の前後に書かせた文字を比較したものである（ためし書きと練習）。図5はワークシートより、授業展開の経過に伴い、本時の目標に沿った文字が書けた児童の割合を表したものである。

【考察】

書き方を理解する場面の前後の文字を比較してみると図4のように「おれ」の方向が変わったり、文字の形が整ったりしていた。画の方向や文字の形に気をつけて書いていることから正しく整った文字の書き方を理解することができたと考えられる。ためし書きで目標に沿った書き方をしていた児童が26%だったのが、書き方を理解する場面の後では

74%に増えた（図5）。授業後のアンケートで教具を使った学習についての感想には「見やすく楽しかった」、「書き方が分かりやすかった」、「書き方がすぐに覚えられた」などの声があった。このことから教材・教具を工夫し、児童自身に正しい書き方を見つけさせることは、書き方を理解させることにおいて有効であると考えられる。

学び合いの場面では、友達の文字を見て目標に沿って書けているかどうか互いの良さや気付いたことをワークシートに書き込んだ。全員が相手の良さを見つけたり、ほめたりすることができ、70%の児童が直した方がよいところを書くことができた。その学び合いの後に目標に沿った文字が書けるようになった児童はさらに

22%増えた（図5）。このことから、児童は書き方を理解する場面において画の方向や整った文字を認識し、それを学び合いで活用することでより理解を深めることができたと考えられる。

図4 ワークシートの文字の変容

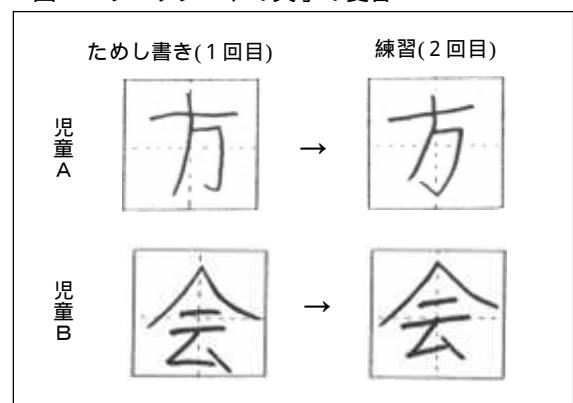
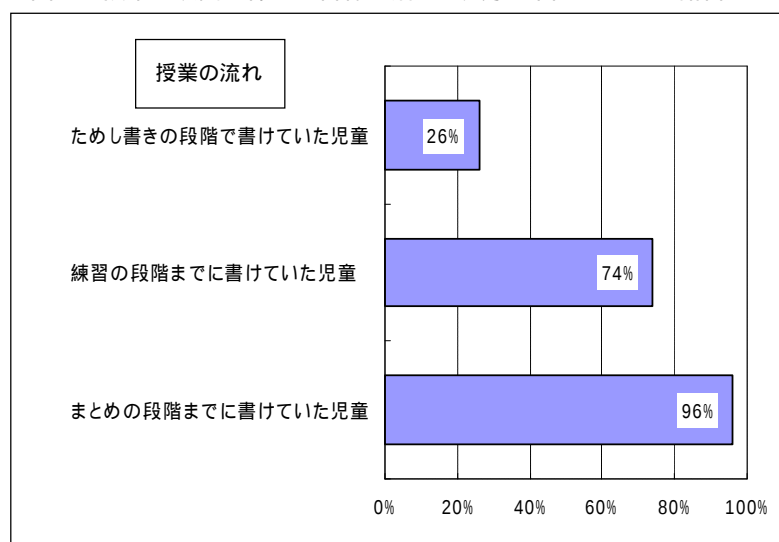


図5 授業の展開に伴って目標に沿った文字が書けた児童の割合



【検証 2】

書写の指導において、基礎・基本を明確にし、発達段階に応じた授業展開を行うことで児童の意欲が高まり、基礎・基本を身に付けることができるであろう。

【結果】

図 6 は学び合いの場面で互いの良さや気付いたことが書き込まれたワークシートである。図 7 は単元後に実施したアンケートより、学び合いの活動が好きな理由である。図 8 と図 9 は、たしかめシートについてのアンケート結果である。

【考察】

正しく整った文字の書き方の理解を深め、学習意欲を高めるために、学び合いの活動を行った。

図 6 は友達とワークシートを交換して互いの良さや気付きを書き込んだものである。良いところや気付いたことを書き込んでいることから、児童は視点を持って相手の文字を見て良否の弁別をしていることがわかる。

単元終了後に実施したアンケートでは 96% の児童が学び合い活動を好きと答えており、その理由として図 7 のように「書き方を教えてもらって勉強になる」41%、「わからないことがわかった」32%などの声があり、前回の検証 1 の結果のように学び合いの活動後、さらに 22% の児童が文字を直すことができたことから、児童は学び合いを通して自分が気付かなかったことを指摘されることで正しい書き方を認識できたと言える。

好きな理由としてほかに「友達とワークシートを見せ合うことが楽しい」64%、「教えてあげることが楽しい」23%という声があったことから、児童は友達と関わりを持つことで楽しさを感じ、学習意欲が高まると考えられる。

図 6 相手の良さや気付いたことが書き込まれたワークシート

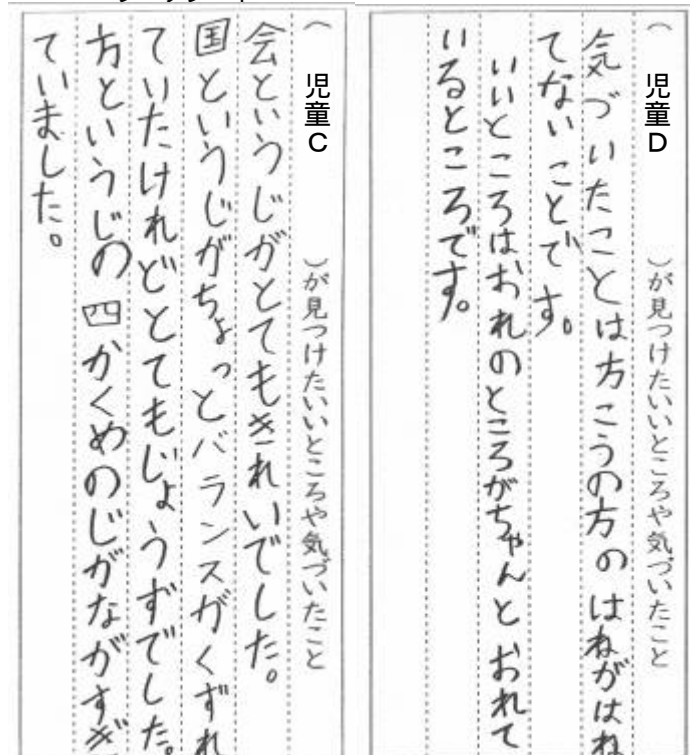
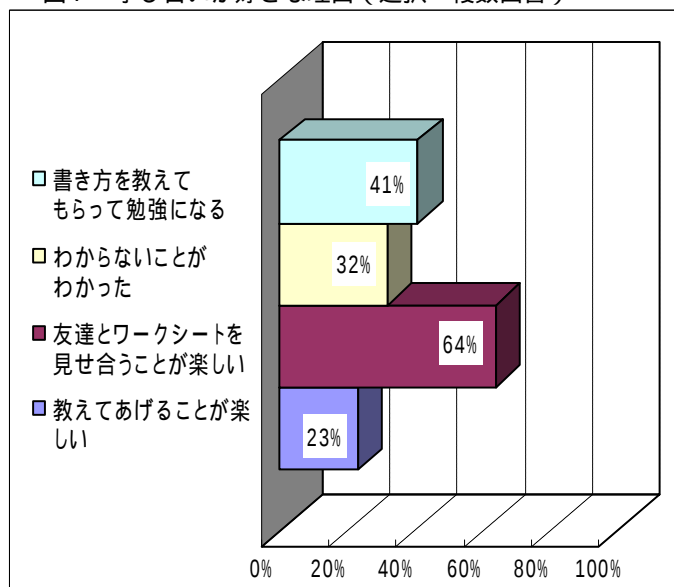


図 7 学び合いが好きな理由（選択・複数回答）



次に，学習内容の定着を図るために本時の目標に沿ったたしかめシートをさせた。たしかめシートをしながら板書を見たり，考えたりしている様子から学習内容を振り返っていることが伺えた。たしかめシートにおいて90%の児童が全問正解しており，ほかの児童もヒントを与えることで答えることができた。

図8のたしかめシートについての感想では91%の児童がたしかめシートに対して肯定的で，これは図9に見られるようにたしかめシートが児童にとって分かりやすくて易しい内容であったからだと考えられる。感想の中には「わからないことがわかった」，「楽しい」，「正解しているのがうれしい」などの声もあった。これらのことから，目標に沿ったたしかめシートで学習内容を振り返ることによって，児童の理解を深め，意欲が高まると考えられる。

最後に，児童の学習意欲を高め，基礎・基本を身に付けさせるには，基礎・基本を明確にし，発達段階に応じた学び合いの活動や理解を深める手だてが有効であると考えられる。

研究の成果と課題

1 成果

- (1) 正しく整った文字の書き方を理解させるために，教材・教具を工夫して文字の形を分かりやすく学ばせることで文字に対する関心が高まり，正しく整った文字が書けるようになった。
- (2) 書写の指導において，基礎・基本を明確にし，発達段階に応じた授業展開を行うことで，児童の学習意欲が高まり，正しく書こうとする態度が育った。

2 課題

- (1) 基礎・基本の定着を図るための系統的・継続的な指導計画の工夫
- (2) 書写の日常化を図る工夫

《主な参考文献と資料》

『小学校学習指導要領解説 国語編』	文部科学省	東洋館出版社	2008
『新しい「基礎・基本」の習得』	浅沼茂 / 編	教育開発研究所	2008
『実践国語研究 - 基礎・基本の力が育つ国語科の授業 - 』	全国国語教育実践研究会 / 編	明治図書	1995 年度版 No.152
『楽しい書写の指導』	市毛勝雄・須田実・野口芳宏 / 編	明治図書	1993
『ワンポイント書写指導 ザ・書き方プリント』	赫多美登里	学事出版	1991
『硬筆・毛筆の連携を図る書写指導』	藤原宏 / 監修	明治図書出版	1989
『わかりやすい書写の授業 - 内容の展開と評価 - 』	藤原宏・渡辺富美雄・片岸年雄 / 編	東洋館出版社	1981

図8 たしかめシートをやった感想

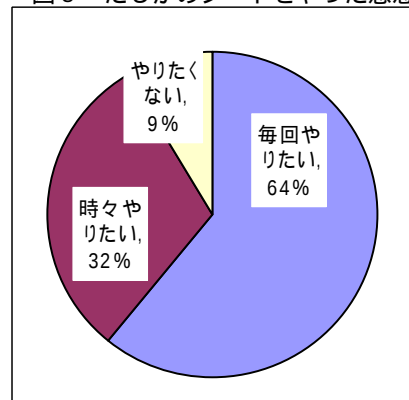


図9 たしかめシートの難易度について

